「牧」から「町」へ－八街の開墾－

「江戸」が「東京」と名を変えて数年が経った明治３年、１７００人余の人々が、八街の「柳沢牧（やなぎさわまき）」と呼ばれていた場所で新たな生活を始めるため、東京から移住しました。この開墾は、明治政府によって設けられた一番から六番の６つの開墾会社を中心に進められました。

それから数年後の明治８年、かつて「小間子牧（おまごまき）」だった土地が旧佐賀藩主・鍋島（なべしま）家の所有となり、鍋島家の「永沢社（えいたくしゃ）」による開墾が始まります。

その後も、千葉県内外から新たな土地や暮らしを求め、たくさんの人々が八街へ移住し、林野を切り開いてまちをつくっていきました。

昭和２０年の終戦後には、陸軍の飛行場跡地が復員兵や引揚者（ひきあげしゃ）、戦災者たちが新たな生活を始めるための新天地となり、昭和の開墾－開拓が始まります。

明治以降の八街の大地は、時代の流れのために苦境に立たされた人々を、何度も救ってきたのです。

※明治時代の開墾の中心人物である、
「西村郡司」「前山清一郎」については、
八街市郷土資料館で常設展示をしております。

【三番会社・大野弘次郎肖像写真】

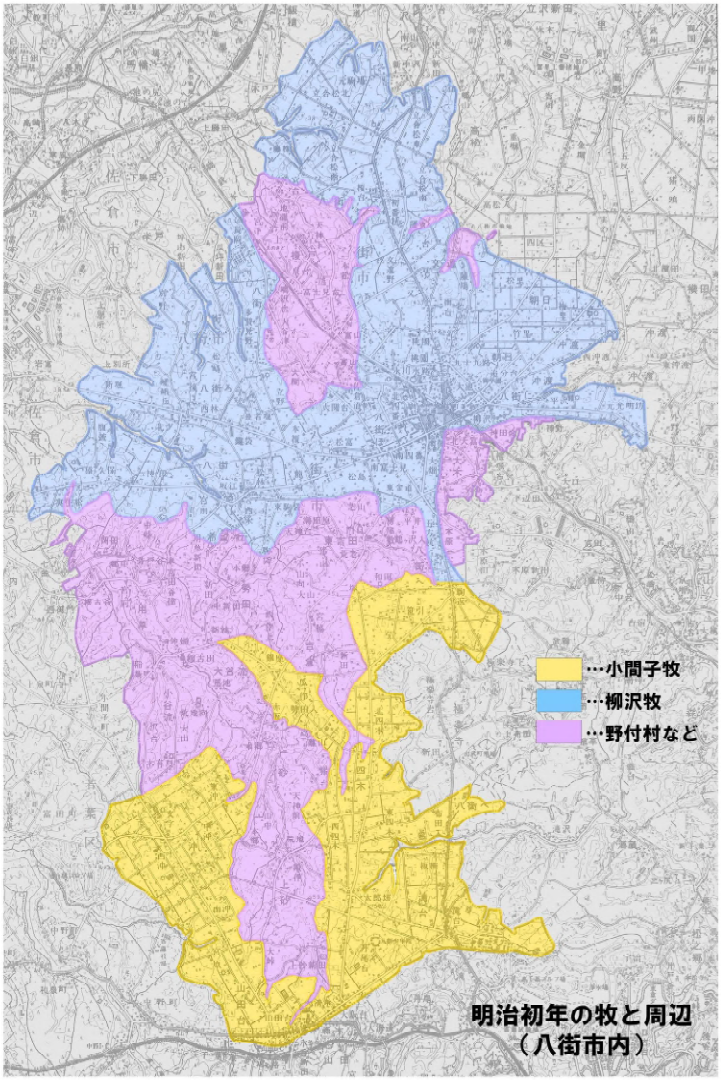
柳沢牧の開墾を担当し、主に三番会社を受け持った西村郡司の片腕として活躍した大野弘次郎が還暦の時に撮影した写真。明治30年に神田神保町に移転した記録の残る、井谷写真館での撮影。開墾初期に携わった人物の写真は少なく、大変貴重な写真です。

【地図に見る開墾前～開墾後のようす】

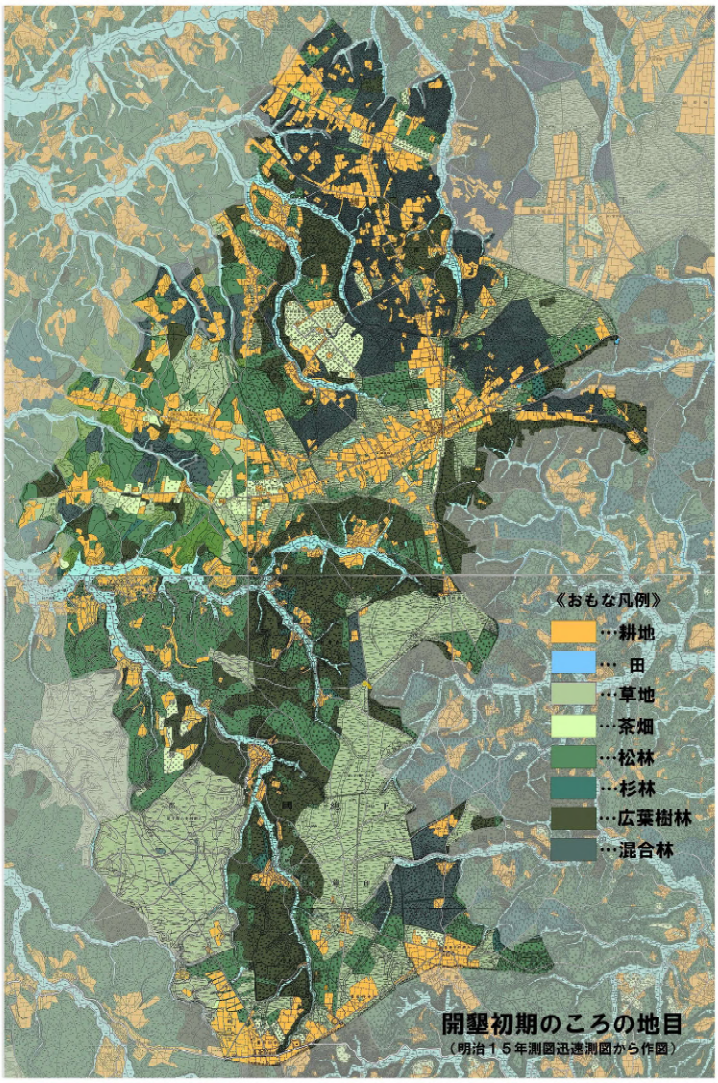
「明治初年の牧と周辺」の図に見えるように、開墾が始まる以前ー江戸時代の八街市域は、北部には「柳沢牧」、南部には「小間子牧」という幕府の直轄地である馬牧、その間や周辺に野付村などの村がありました。野付村は、幕府から牧の維持管理を命じられた村で、その負担の対価として牧の木々や下草・山菜などの売買を許されていました。「開墾初期のころの地目」に見られる松林などの樹林は、野付村の人々によって植林されたもので、牧だった時の名残（なごり）の景色です。江戸時代には、日々の暮しに欠かせない薪や炭などの木材の産地としての姿もあったのです。

開墾初期の時代から１００年ほどが過ぎた平成の始め頃の地形図によると、八街の大部分が耕地になっています。（統計上では平成７年の経営耕地面積は、市の面積の約４２％です）

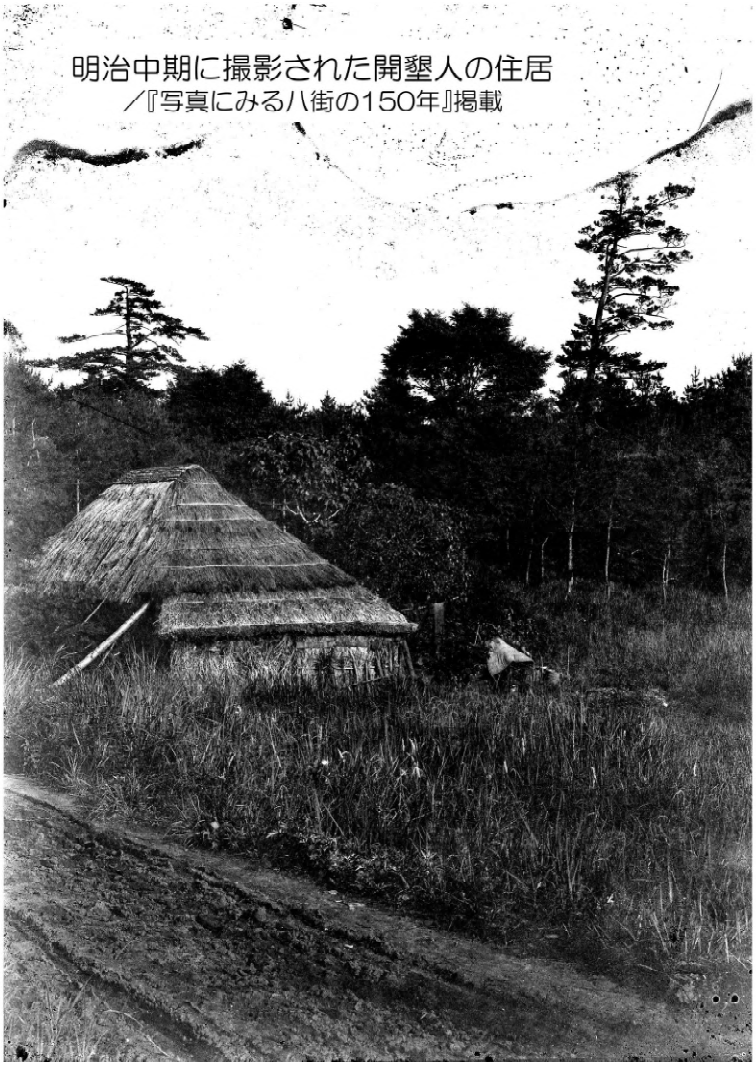
野付村と牧の時代、木炭や薪・山菜などの産地としても江戸の町の人々の生活を支えた土地は、明治時代以降は東京や近隣に食を供給する農産地に姿を変えていきました。増え続ける首都圏の人口を支える台所として、八街の耕地は広がっていったのです。



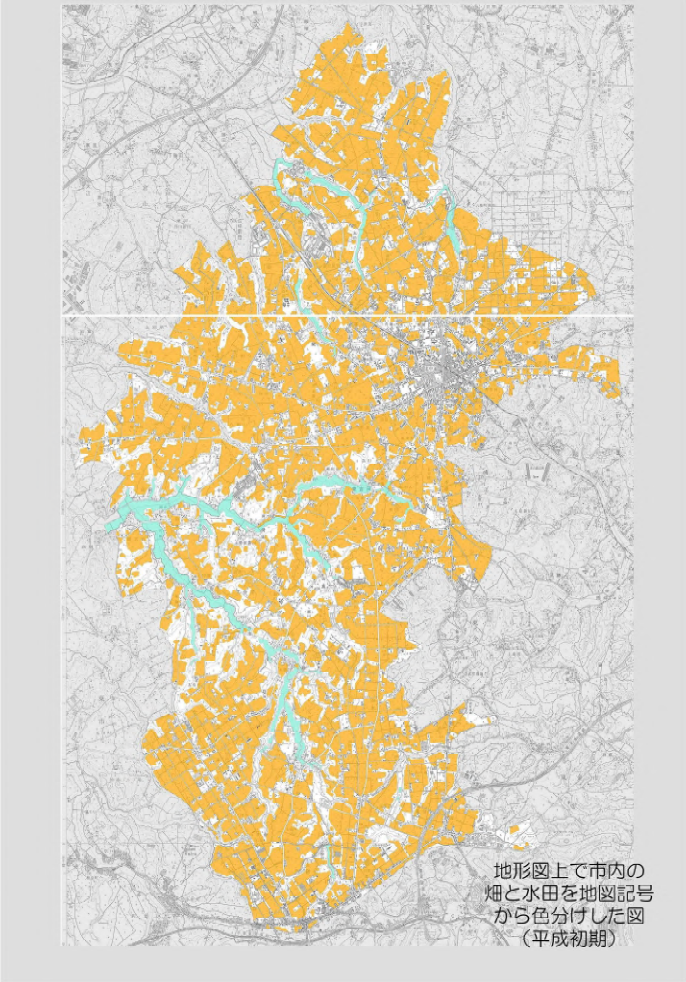
明治初年の牧と周辺
（八街市内）



開墾初期のころの地目
（明治１５年測図迅速測図から作図）



明治中期に撮影された開墾人の住居
／『写真にみる八街の150年』掲載



地形図上で市内の
畑と水田を地図記号
から色分けした図
（平成初期）

八街飛行場周辺空撮（昭和22年米軍撮影）

この跡地が戦後の開拓で現在の朝日区になります。

↙『写真にみる八街の150年』掲載

【昭和の開墾ー終戦後・朝日区の開拓】

昭和１４年、八街と富里の一部が陸軍飛行場用地として買収される事が決まります。当時、軍部の意向は絶対的なものでしたので、住民たちは断腸の思いで住み慣れた土地を離れ、各地に移住して行きました。

終戦後の混乱期、戦災者や復員者・引揚者の救済と、不足する食料増産のために、緊急開拓事業が進められる事が決定し、軍用地だった八街飛行場跡も開拓用地になりました。

その後、開拓地を国から個人に売却するにあたり、地区の名前も一新する事になり、住民による協議の結果、字（あざ）が「朝日」、小字（こあざ）が「松の里」「竹の里」「梅の里」と名付けられました。（「朝日区の歴史ー五十年」参照）

―八街町鳥瞰図に見る―
昭和初期の八街駅周辺

松井天山（天山は画号、本名：哲太郎）は、「日光中禅寺真景図」や「金龍山浅草寺境内図」などの他、「千葉市街鳥瞰」や「千葉県成田山新勝寺鳥瞰図」など、千葉県内の鳥瞰図を数多く発行しました。

「千葉県八街町鳥瞰」と同じ頃に、佐倉や四街道などの鳥瞰図も制作されています。裏面には商店などの広告も掲載されていて、現在のガイドブックのような役割も持っていました。

松井天山の鳥瞰図には、地形図のような正確さはありませんが、立体的に描かれた建物にはそれぞれの特徴が表されています。

昭和４年２月に発行された「千葉県八街町鳥瞰」には「昭和参(３)年十月吉日写生」の記載があり、発行の前年に天山自身が八街を訪れ、駅周辺の賑わいを実際に見て描いたことがわかります。八街市内で当時の写真などが残されている場所は少なく、昭和初期の八街駅周辺の様子を知ることのできる貴重な資料のひとつです。

千葉縣八街町鳥瞰

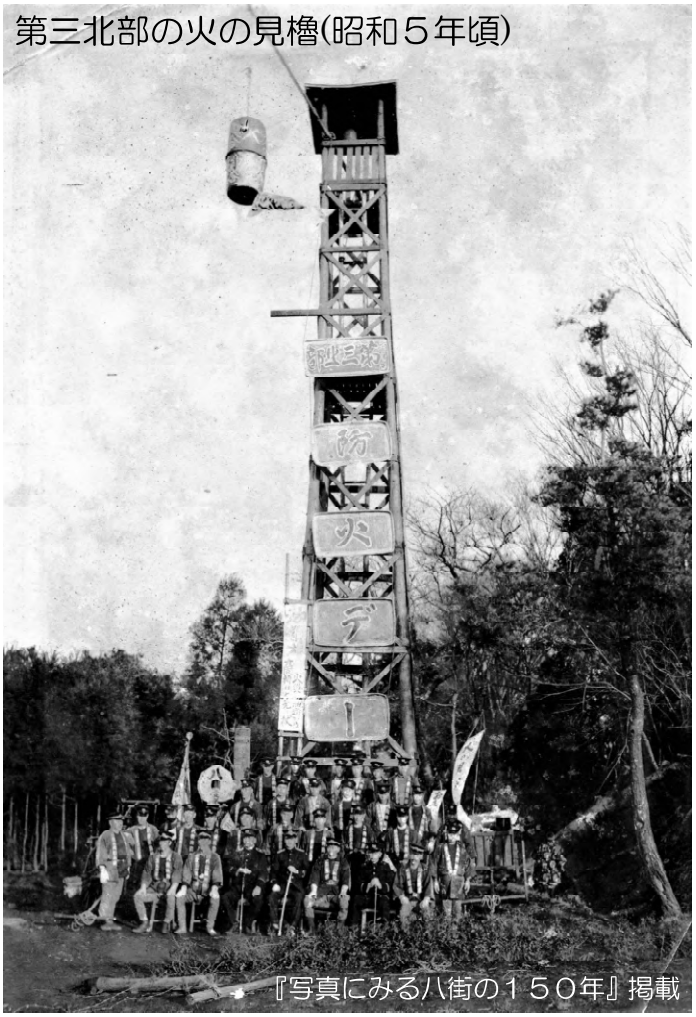
昭和参年十月吉日写生

松井天山

高名商工廣家案内
株式会社三富銀行
海産專製材場
金造
大野運送店
篠崎運送店
明石屋運送店
蔵村運送店
篠崎藥局
佐々木自轉車店
長野屋絨洋品店
大野屋履物店
五木田乾司
花木自轉車店
日暮製材所
大野呉服店
古角乾店
中村信自轉車店
大野屋商店
吉岡新聞舗
富士屋商店
森田屋米店
池田商店
鈴木歯科医出張所
大□商店
猪野商店
櫻井商店
竹之内石松
植名鍛冶工場
神誠堂本店
鈴木ポンプ店
白鳥呉服店
宮崎喜七
秋山呉服店
片山清商店
牛尾茶重
上野菓子店
鈴木吉松
尾澤書店
小川義光
千登世
御料理金田樓
御料理都家
御料理山本館
御料理都家支店
御料理カフエー千代田
御料理泉家
御料理角屋
御料理榮屋
御料理竹屋
大榮家
代書業西澤栄太郎
中村商店
長井鶴郎
福岡清之助
小林藥局
三浦商店
小平復三商店
翁屋車舗
廣川柳次
齊藤傳
田中商店
田中支店
齊藤一郎
小澤自轉車店
平山直司
越川勝太郎
赤星竹松
入江嘉物次
齊藤太郎
小澤一郎
工場
柳田浦商店
安藤呉服店
土屋三郎
林林商店
林金七
帶屋作
城南堂
渡邊金物店
獸医総監院
木島農藥店
川崎材木店
製材工場
目良助一
木村屋商店
岡村醫院
林工務所
理髮所
豊長葉倉庫運送部
竹山政彦
乱藤時計店
遠藤商店
鈴木藤吉
長谷川醫院
鈴木ポンプ
関川商店
齊藤製材所
森傳次郎
佐藤歯科醫院
今井歯科醫院
自井歯科醫院
酒類問屋
杉井
醸造
九次郎
醤油
前田商店
八雲館
劇場
新廣屋
問屋
西村隆次
安井彦四郎商店
宮崎
分秋山呉服店
湖月堂
奈良屋書店
塩野谷商店
田中金太郎
篠崎俊
篠崎運送店
明石屋運送店
蔵村運送店
海産專製材場
金造
三富銀行
株式会社
大野運送店
八
三番
二番
一番
上野菓子店
尾澤書店

長野商店(昭和６０年頃)

『写真にみる八街の１５０年』掲載



第三北部の火の見櫓(昭和５年頃)

『写真にみる八街の１５０年』掲載

【鳥瞰図に描かれた建物】

八街町鳥瞰図には、当時のいろいろな建物が描かれています。店舗正面の立ち上がりに、装飾を施した「看板建築」と呼ばれるモダンな建物も見られます。写真の火の見櫓(やぐら)は鳥瞰図が描かれた少し後(昭和５年頃)に建てられたと思われます。鳥瞰図に描かれた火の見櫓も、この様な佇(たたず)まいだったかもしれません。

「町」から「市」へ－高度経済成長期以降の八街－

苦しかった戦争と戦後の復興期を乗り越え、おとずれた高度経済成長期(昭和３０年～４８年頃)、八街も大きく発展しました。

昭和２８年に町村合併促進法が制定され、近隣との協議の結果、昭和２９年１１月１日、八街町と川上村が合併します。その少し前には大木と木原の一部、昭和３１年に沖渡の一部も八街に編入し、現在の八街市域が形づくられます。その後の発展とともに、道路の舗装・拡幅も進み、鉄道につながる交通ネットワークとして、八街駅を発着するバス路線も増えました。

昭和の終わり頃からは、住宅地として造成される土地が増え、多くの新住民がマイ・ホームを求めて八街に移住します。それにより、人口も増加していきました。

首都圏の食と住を支えて、平成４年に八街は千葉県で30 番目の市となりました。

大正時代から、昭和 26 年までの八街町役場。
（昭和 40 年代）

旧川上村役場。合併後、昭和３２年まで
川上支所となった。　（昭和３０年代）

開墾百年記念式典（1969 年）

合併 20 周年記念式典（1974 年）

「町」から「市」へ（1992 年３月 29 日）

役所入口の案内板も、「市」に。（1992 年）

実住小学校前の歩道橋に掲げられた横断幕。

八街町役場（1951～1981 年）

町役場２階にあった有線放送の交換台

農協会館

南部農協

『写真にみる八街の１５０年』掲載

八街駅南口にあったバスの待合所(昭和６０年頃)

鉄道に続く道路網の発達によって、八街駅は各地をつなぐバスのターミナルとなり、多くの路線が発着していました。南口のバスプールに、たくさんのバスが並ぶようすを覚えている方も多いのではないでしょうか。自家用車の普及で路線の数は減りましたが、現在も運行している路線やふれあいバスなどが人々の移動を助けています。

『写真にみる八街の１５０年』掲載

南口バスプール(昭和４７年)

自然との共存－災害を乗り越えて－

「三年庚午九月八日辛未、(中略)大風大雨、屋ヲ發キ墻ヲ破リ、永代橋・新大橋ヲ損シ、新島原ニ於テハ倒家傷者ヲ出ス」（『東京市史稿－変災編第３』より）

訳：明治三年九月八日、(中略)大風と大雨が家の屋根を壊し、塀を破った。
永代橋・新大橋にも被害があり、新島原では家が倒壊し負傷者も出た。
（庚午・辛未は日付を十干十二支で表記したもの）

明治３年９月８日、柳沢牧に入植して間もない人々を襲った暴風雨は、東京でも被害があったという記録が残されています。開墾開始直後の、ほぼ原野だった土地を襲った暴風雨は、建って間もない開墾人の住居を倒壊させ、人々は成す術（すべ）もなく嵐の過ぎ去るまでを耐え忍んだということです。（『八街町史』参照）

風水害だけでなく、水源の乏しい北総台地では少雨の時には干ばつが起こり、作物に甚大な被害を及ぼしました。特産物である落花生の生産にも影響が大きく、昭和30年代からは、かんがい事業が進められました。

防ぎようのない自然災害に見舞われても挫折することなく対応策を考え、乗り越えて来た人たちの努力が現在の八街市をつくり上げて来たのです。その努力の結果である耕地から、強風にあおられて土埃（つちぼこり）が舞い上がります。その情景は、土に実った八街の誇りであるといえるのではないでしょうか。

ナバつの被害を受けた里芋畑（昭和50年）

畑地かんがい施設の一部（昭和40年代）

台風34号に伴う強風による被害（昭和42年）

台風15号に伴う自衛隊の災害派遣
（入浴支援／令和元年）

『写真にみる八街の150年』掲載

昭和３６年の八街駅南口

『写真にみる八街の150年』掲載

昭和36年の八街駅南口

八街銀映
（1960 年頃／二区）

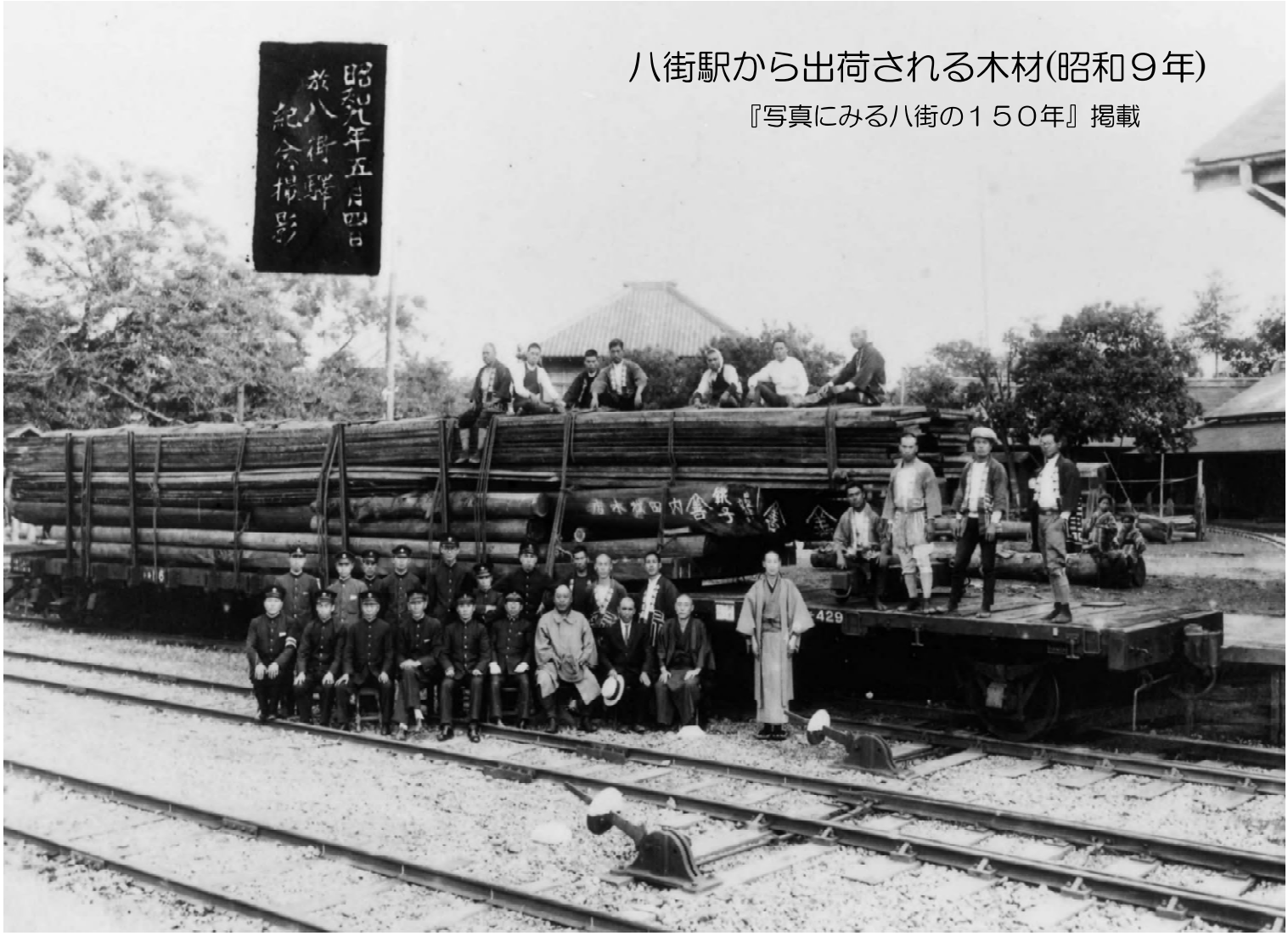
『写真にみる　八街の 150 年』掲載

南口駅前商店街（1960 年代）／『写真にみる八街の 150 年』掲載

すずらん通り入口（昭和４０年代）／『写真にみる八街の 150 年』掲載

八街十字路（日向入口方面・１９６０年代）／『写真にみる八街の 150 年』掲載

八街十字路（二区方面・１９６０年頃）／『写真にみる八街の 150 年』掲載



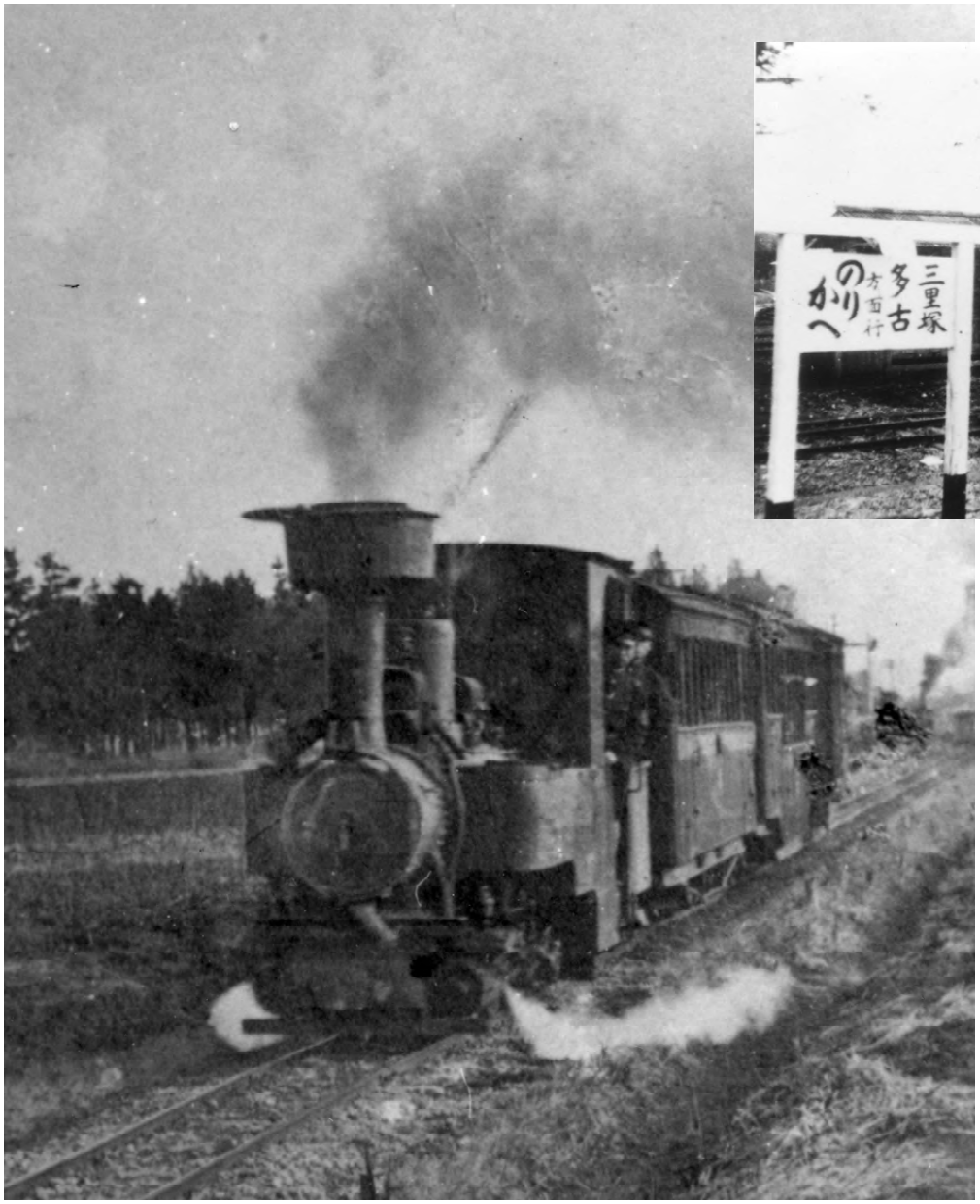
八街駅から出荷される木材(昭和９年)

『写真にみる八街の１５０年』掲載

【鉄道と八街】

明治時代になり、新しい技術が取り入れられるようになると、水運が中心だった大量輸送に、鉄道による輸送という方法が新たに加わりました。

明治３０(１８９７)年５月、段階的に延伸していた総武鉄道の本所(現・錦糸町)－成東間が開通し、八街駅が開業します。水運が隆盛の時代には、不利だった八街の立地が、鉄道の開通によって新しい流通の拠点となり、周辺地域も含めた産物の集散地となりました。開墾によって拓かれた土地に、鉄道が新たな物流と人流を産み、八街は大きく発展していきました。



↑軽便乗り場へ向かう人々

←軽便鉄道八街線は、大正３年から昭和１５年まで、八街－三里塚間を走っていた、小さな鉄道です。左奥の林は「ケイベン山」と呼ばれていました。（現八街中学校付近）

↓八街駅を出発した蒸気機関車。大正５年撮影。

（写真はいずれも『写真にみる八街の 150 年』掲載）

川上中学校増築校舎上棟式記念（昭和32年）

上棟式のお餅をもらう
実住小の生徒たち

地域の学校建設に、地域の人々が深く関わっていた時代がありました。

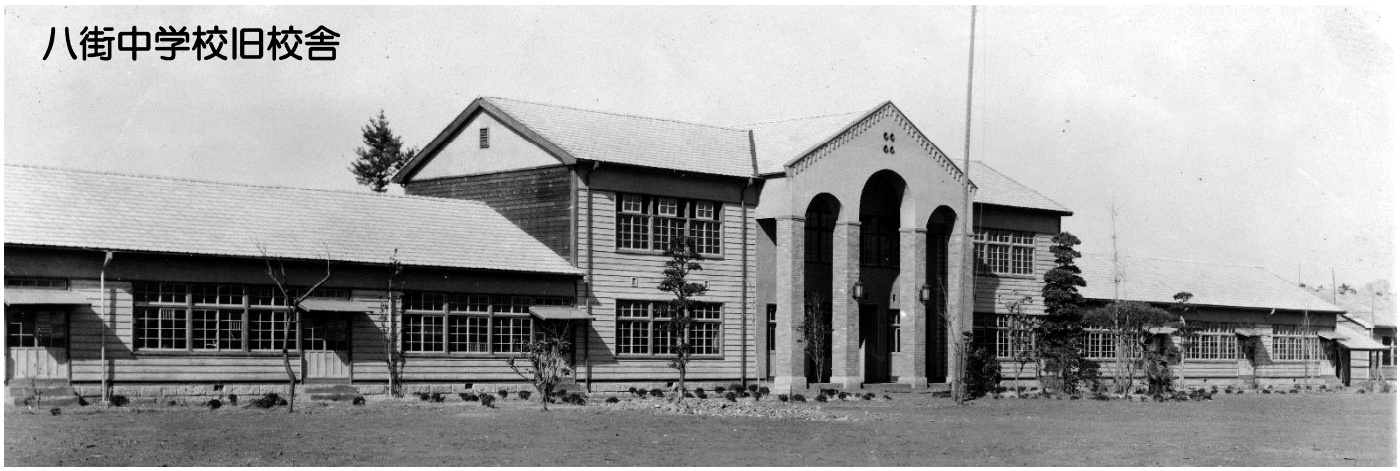
実住小学校校舎上棟式での餅まき（昭和30年代）

【八街農林保育園　最後の卒園式】

平成２年に閉園した八街農林保育園の最後の卒園式。昭和２６年に開園した農林保育園は、現在のけやきの森公園の場所にありました。

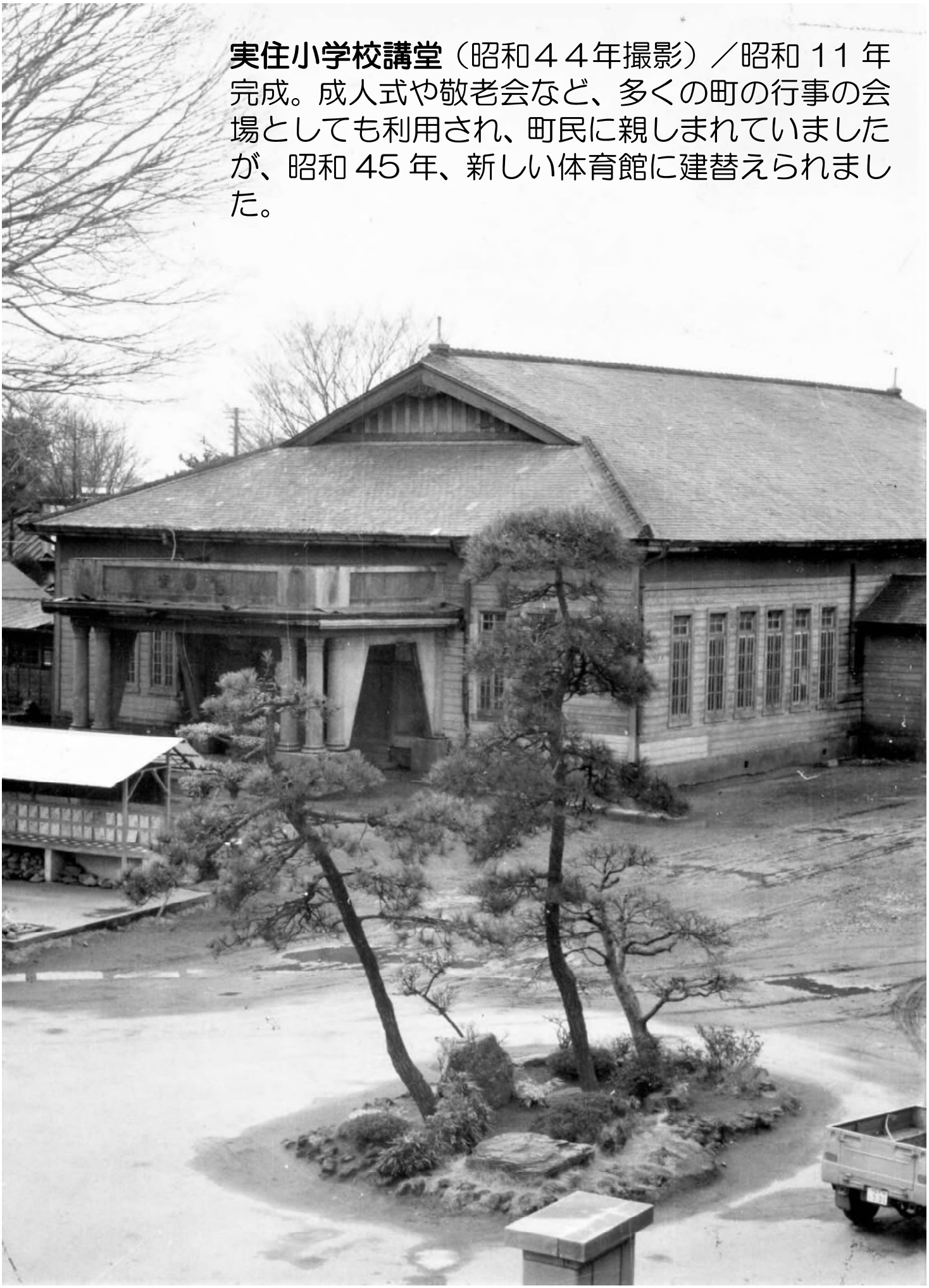
八街高等女学校(八高女)は、昭和２１～２３年まであった、県立八街高等学校の前身の学校です。

※統合により中央中学校朝陽校舎となる(1966 年まで)



交進小学校入学式（昭和４６年）

朝陽小学校１００周年記念式典（昭和 59 年）

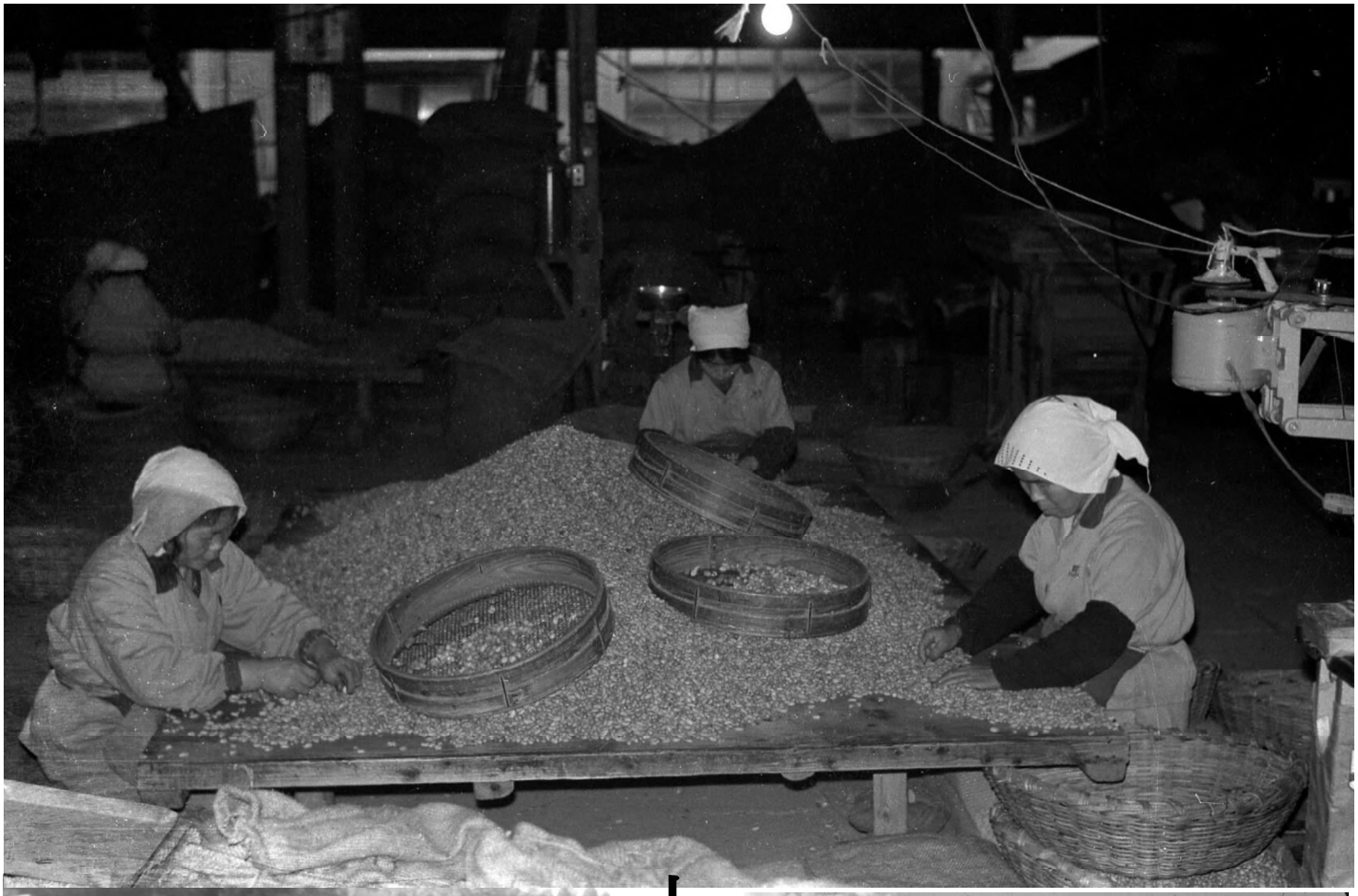


実住小学校講堂（昭和４４年撮影）／昭和 11 年完成。成人式や敬老会など、多くの町の行事の会場としても利用され、町民に親しまれていましたが、昭和 45 年、新しい体育館に建替えられました。

八街中学校校舎内の階段（昭和４５年撮影）／昭和２４年に建てられたこの校舎は、昭和４８年に建て替えられました。

電話ネオンまつり（１９５６年）／『写真にみる八街の 150 年』掲載

落花生まつりの大名行列（１９５７年）／『写真にみる八街の 150 年』掲載



土に実りぬ

実りの大地を次の100年へ

落花生やスイカ、にんじんなど、季節ごとに様々な作物が豊かに実る畑地、稲穂の揺れる谷津田など、鮮やかな緑と青い空が印象的な八街の自然。それは、首都圏の食を支える農業大国千葉県の一翼を担ってきた豊かな自然です。食を支えるということは、生きることを支えることでもあります。人々の生を支えてきた八街の自然を守り、次の１００年につないでいくための取り組みも行われています。

特産のひとつであるショウガを利用し、商工会議所が開発した飲料『八街生姜ジンジャーエール』や、新たにぶどう園を作り、そこで収穫したぶどうを醸造するワイナリーを立ち上げた事業所など、生産するだけにとどまらない活動が、新たな発展につながっていくことでしょう。

また、東京エリアに近接した立地を活かし、気軽に訪れて自然を体験できる施設も増えています。市内の交通環境改善の一環として整備された県道成東酒々井線『八街バイパス』（千葉県実施・令和２年度全線開通）は八街のみならず、近隣へのアクセスの改善にもつながっています。

谷津田（榎戸）

桜並木（用草）

富士山とらっかぼっち
（五区）

日枝神社（砂）

生姜畑と八街生姜ジンジャーエール＆ドロップス
YACHIMATA
八街生姜
ジンジャーエール
ドロップス

ぶどう園
と
ワイン
（小谷流）